

科学と社会委員会（第 24 期・第 8 回）議事次第

1. 日 時 平成 31 年 1 月 25 日（金）

（※会則第 31 条による委員会における議決方法の特例により、メール審議を行った）

2. 審議内容

提案 1 提言等にかかる SDGs 関連項目の提出のお願いについて

3. 結果

提案 1 について原案のとおり承認された。

科学と社会委員会（第24期・第7回）議事要旨

1 日 時 平成30年10月4日（木） 12:20～13:05

2 場 所 日本学術会議5階 5-C（1）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、小林 傳司（第一部会員・副委員長）、
高橋 桂子（第三部会員・幹事）、遠藤 薫（第一部会員）、藤原 聖子（第一部会員）、
松浦 純（第一部会員）、古谷 研（第二部会員）、坪井 俊（第三部会員）、
藤井 良一（第三部会員）

（欠席） 小安 重夫（第二部会員・幹事）、甲斐 知恵子（第二部会員）、
西村 いくこ（第二部会員）、平井 みどり（第二部会員）、中村 崇（第三部会員）、
沖 大幹（連携会員）、蟹江 憲史（連携会員）

（事務局）犬塚参事官、酒井参事官補佐、鳥生審議専門職

4 議事要旨

（1）科学と社会企画分科会からの報告と課題

●渡辺委員長より、資料1-1及び1-2に基づき、科学と社会企画分科会及びそこで審議された日本の展望に続く提言について報告があり、以下の補足があった。

・科学と社会企画分科会の審議に基づく提案を10月3日の幹事会懇談会で行い、先ずは10月25日の幹事会で体制作りを行うこととなった。

●上記に基づき意見交換があった。概要は以下の通り。

- ・前回の日本の展望の内容をある程度引き継ぐものにする必要があるだろう。
- ・「提言」という形式は堅苦しいので、もっと国民に親しみやすい形式が良いのではないか。
- ・学術会議が議論を積み重ねて社会に提案するものなのだから、やはり「提言」とすべきではないか。

（2）提言等の見える化について

●藤原委員より、資料2-1～2-3に基づき、インパクト・レポートの改訂等について説明があり、意見交換があった。概要は以下のとおり。

- ・資料2-2については、案1が分かりやすい。掲載の順番は「ポイント」→「インパクト」が良いだろう。
- ・現状のインパクト・レポートは1年後に作成し、その後のフォローが無い。1年が過ぎた後もインパクト・レポートを改訂出来れば、どう活用されているかが分かる。
- ・資料2-3の動画やリンクについては、どこまでやれるか事務局に確認したい。
- ・会長が行っている記者懇談会でアピールしてはどうか。
→記者に関心のあるものでなければ取り上げてもらえないので、見せ方を工夫する必要があるだろう。

●本件については委員に考えて頂き、次回委員会で時間を取って審議することとなった。

（3）主張が異なる提言や報告の対応について

●高橋幹事より、以下の通り説明があった。

- ・（私が委員長を務める）危機対応科学情報発信組織準備委員会では、難しい問題に対し、

学術会議の意見をワンボイスにするかどうかを検討している。

- 一つの方法として、意見分布を示し、それぞれに丁寧な説明を加えていくというのがある。
- 一方で、提言等の結論に対し、違う意見を認めるのが重要ではないか。それらの意見に言及した上で、科学としてはこう考える、という形なら、提言の科学としての意味は保たれるのではないか。
- 以上をお示しした上で、科学と社会委員会のご意見を頂き、それを再度、危機対応科学情報発信組織準備委員会に持ち帰って検討した上で、幹事会に提案したい。

●上記に基づき意見交換があった。概要は以下の通り。

- 査読の際、提言作成委員会等がチェックシートに関連する提言等を書くようになっているが、どこが同じでどこが違うかを具体的に書くようにし、査読者もそれをよく確認するようにしてはどうか。
- 全ての提言等に対してそれを行うのは査読者の負担が増えるので、社会的に重要な問題に係る提言等についてのみ行うのなら理解できる。

以 上

科学と社会委員会 科学と社会企画分科会（第24期・第2回）議事要旨

1 日 時 平成31年12月28日（金） 15:00～17:00

2 場 所 日本学術会議6階 6-B会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、藤原 聖子（第一部会員・幹事）、
川口 慎介（連携会員・幹事）、遠藤 薫（第一部会員）、沖 大幹（連携会員）、
西嶋 一欽（連携会員）

Web出席 高山 弘太郎（連携会員・副委員長）

（欠席） 三成 美保（副会長・第一部会員）、高瀬 堅吉（連携会員）

（事務局） 犬塚参事官、酒井参事官補佐、鳥生審議専門職、奥野審議調査専門職

4 議事要旨

（1）日本の展望2020案の内容について

●渡辺委員長より説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。

- ・10数項目の日本が抱える重要課題が挙げられているが、社会の実際の問題である人口縮小など具体的な問題と、学術に関連して起きている、例えば、研究力の低下、大学の改革等は、性質が異なる。こういったタイプの課題にフォーカスするかということ、最初に明確に検討して、その中からどれを取り出すかという話をすべきかと思う。
- ・問題を問題として認識している時点としては、専門家には解決策は見えているわけで、そこで学術の知見で問題を問題として適切に捉えるというものを出す。つまり学術が何をしますかではなく、ここまでの学術のプロダクトとして、日本の問題をちゃんと捉えています、というものを出すのが大事ではないか。
- ・2030年、2050年に向けてシナリオも書きましょうということになっているので、今抱えている問題が、どこ時点での課題なのかということが重要。2030年、2050年も課題のままあり続けるのかというのを、もう少し丁寧に整理する必要があるのではないかと。そういう意味で、山極会長の2030年、2050年に向けた方向性で学術がどう考えて、社会に対してどういう発信をすべきなのか、という書き方は、危機感を煽るのではなくて、こういう日本になって行きましょう、という形の結論の付け方で整理できればよいと思う。
- ・企画分科会から具体的な案を、「こういうのもあります」というような形で会長に提案し、そこから修正していった方がいいのではないかと。

*現在は幹事会附置委員会の22人ぐらいで議論しているところなので、企画分科会から提案を含めるなり、体制をどうやっていくか、次回の展望委員会に議論する予定。これを議論するのに当たり、若手アカデミーでの議論をどう扱うか考えているが、他の委員の意見を聞きたい。

- ・現在の状況を見ると、別々で書いて作った方がよいのではないかと。高校生以下の人たちが理解できるようなものであることが望ましい。
- ・若手アカデミーとしての視点で検討・作成することはできると思う。
- ・学術というのに何を期待しているのか、忌憚のない意見を貰った方がいいのではないかと。ここに外部との議論を通じてと書いてあるが、本当にやるのであれば、内部の委員会というよりは、外部の人に日本学術会議はこういうところがおかしいのではないかとか、あるいは30年前、50年前の大学のイメージで語られては困るとか、そういう対話が必要ではないかと。

(2) SDGsの取り組みについて

- 渡辺委員長より、資料2-1及び資料2-2により説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。
 - *ここで聞きたいのは、どういうプロセスでやっていけばいいのか、運営的なことである。
 - ・機械的に、提言を出した委員会や分科会が、関連しているSDGsを申し出るのでもいいのではないか。
 - ・既に今期公表された提言については、責任者にチェックリストの追加部分を提出いただくよう進めるのがよい。

(3) 第18回アジア学術会議科学と社会委員会と若手アカデミー合同会議報告について

- 西嶋委員より、資料2-3のとおり報告があった。主な内容は以下のとおり。
 - ・難しかったと思うのは、議論に加わって欲しい人をこの会議に呼べなかった。そういう人を呼べると話題提供をもとに、もっと活発な議論ができたと思う。
 - ・あの場でこのようなテーマの会を設けること自体に意味があったと納得している。
 - ・まず一歩ということで、あの形式に縛られない形で、もう少し展開していくのがよい。

(4) 異なる意見の公表について

- 渡辺委員長より、資料3により説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。
 - ・資料38ページの最近改定したチェックシートの「9. 既出の提言等との関係、日本学術会議の既出の関連提言等を踏まえ、議論を展開している。はいorいいえ」が従来からあるが、さらに追加された「※9で「はい」を記入した場合、その提言等のタイトルと発出委員会・年月日をお書きください」があるので、これを参考に提言者と幹事会で検討すればよい。
 - ・提言の最初には、「この提言は、〇〇委員会（分科会）の審議結果を取りまとめ公表するものである。」と記述があるので、基本的には立場や分野によって異なる意見が出ることも当然あると認識すべきである。
 - ・外部からの問い合わせや反論がある場合は、それなりの検討と対応が必要であるが、基本的には異なる意見があることを示すのは問題ない。
 - ・特に反論等のない場合でも、対立する意見をもとに対話をするシンポジウムなどの企画をするのも一案である。

(5) 今後の活動について

- 今日の議論を取りまとめて、必要に応じて幹事会に提案すること、また、予算の関係から委員会自体が3月までは開催できないため、必要があればメール審議を行うことが了承された。さらに対面会議は4月目途で開催することが了承された。

(6) その他

- 渡辺委員長より、三成委員の辞任について説明があり、辞任及び次回の幹事会に報告することが了承された。

以 上